

故郷第六場面 読んだ読んだ

彼は後ろを向いて、「シユイシヨン（水生）、だんな様にお辞儀しな。」と言って、彼の背に隠れていた子供を前に出した。これぞまさしく三十年前のレントウであった。いくらかやせて、顔色が悪く、銀の首輪もしていない違いはあるけれども。……夜はまた世間話をした。とりとめのない話ばかりだった。明るる日の朝、彼はシユイシヨン連れて帰っていった。



主人公とレントウの関係は変わってしまった。レントウは昔、主人公のことを下に見ていたが、今では主人公にへりくだるようになっていた。また、神秘の宝庫のようだった心も消え、とりとめのない世間話ばかりするようになっていた。主人公も変わってしまった、生活が苦しそうなレントウを見て、でくのぼうみたいな人間とたとえるようになっていた。このような様子から、クラスの中では、レントウが主人公に会いに来たのか、立場を利用して物をもらいに来たのか、という二つの意見が出た。

さん

主人公は、レントウと再会して、金や生活ばかりの話をした。強いて言うならば、母親が「なんだってそんな他人行儀」や「昔みたいに『シユンちゃん』でいいんだよ」というセリフは母ではなく、主人公が言うべきことだ。そういう面から見ても、主人公は世の中の厳しさを知ったという感じである。

一方、レントウがこの家に来た目的は、主人公との再会ではなく三十

三年一組

氏名

年ぶりの家具との再会かもしれない。でも、一つ言えることは、主人公はレントウのことはいい風には思っていない、思っているのならば、『でくのぼう』なんて言わない。以前から、でくのぼうと思っていた可能性が高い。やっぱり、レントウに同情しているのか、あまりいい風に思っていないのか。人間は、金で全てが変化する。

さん

レントウが来た理由は、会いたいという気持ちも少しはあるけど、「家に用が多いから明日は帰らねばならぬ」「昼飯もまだ」と言っていて、生活が苦しくゆとりがないことを主人公に知ってもらい、品物ももらい、ご飯をいただくと考えていたのではなからうか。また、大人になって立場を意識するようになったはずなのに、長テーブル二個、いす四脚など、たくさん品物ももらっている。レントウが下の立場でもらっているなら、少しだけのはずだろう。生活にゆとりがなくなって、他のことに興味がなくなって、主人公がうらやましく思っていた神秘の心はなくなってしまったのだ。

さん

主人公は、レントウと再会し、会話を交わした。その後、レントウの暮らし向きが良くないことを知った。三十年前のレントウは、心がまるで神秘の宝庫のようだったが、今の姿は、生活がとても苦しいことを現していた。そして、主人公は、暮らしにゆとりがないから、「でくのぼうみたいな人間」だと思った。そのレントウは、純粹に会いに来たのか、それとも、立場を利用して物をもらいに来たのか。私はあまりにも生活が苦しいから、物ももらいに来たのだと思う。

さん